◉特集

タイ国日本人会の

社会貢献活動

報告②

毎年恒例のタイ国日本人会チャリティーバザー。今年は10月21日（日）に開催です！　収益と寄付金は、日本人会チャリティー基金運営委員会で検討され、支援が必要なタイの人々のもとに届けられます。先月号に続き、日本人会が支援している活動団体をご紹介します。

チャンタミット社

シーカー・アジア財団

支援

チャンタミット社

奨学金

『ハンセン病を病んだ人の子弟への奨学金活動にご支援を得ています。その奨学生を対象とした第14回タイ国青少年ワークキャンプを開催しました』

チャンタミット社協力者　阿部春代
（公益社団法人好善社派遣看護師
コンケン県立シリントン病院勤務）

チャンタミット社は、タイ国のハンセン病を病んだ人々とその家族の真の友となることを目的としたキリスト教のＮＧＯで、昨年創立30周年を記念しました。当初から、ハンセン病を病んだ人の子弟が教育の機会に恵まれないことをふまえ、その子どもたちが元気に育つことを願い、国立のハンセン病施設内に保育園を開きました。また２００１年から奨学金活動を始め、２００２年からその一部ナーン県ファイゲーウ村の子どもたちが日本人会からのご支援を得ています。

その後、タイ国が幼児教育から青少年育成に力を入れ始め、保育所運営６カ所が２０１２年から１カ所となりました。また、奨学金活動も新規認可を増やさずに勉学中の奨学生が確実に高等教育を修了できるように努めてきました。

チャンタミット社全体の奨学金活動は、２０１７年度までの16年間に奨学生の数が２１１名で、延べ数にすると１１２８名となり、高等教育を卒業が１１８名になりました。

この奨学生を対象に、ハンセン病問題を正しく理解する場を提供し、また地域の青年リーダーを育てる目的で２００５年から始めたのが、タイ国青少年ワークキャンプです。初回から日本の青少年も10名前後が参加し、５回目からオーストラリア人も加わりました。昨年７月号のクルンテープに掲載された報告書の一部に、２０１６年11月のラムパン県で開催した12回目のキャンプの様子を紹介いたしました。

国立のハンセン病施設で生まれ育った青年たちが参加費を払い、２泊３日の共同生活で、朝６時から夜９時までのプログラムを共にします。初回は１００名を超える参加者でしたが、回を重ねる中で徐々に相応しい人数とプログラムが整ってきました。また、２０１４年に日本でのワークキャンプ・リユニオンへ青年代表を招いたことから、タイでもキャンプ後リユニオンが始まり、そこで青年実行委員会を立ち上げ、準備段階からキャンプの役割一部を担う体制が昨年から始まりました。過去２回のリユニオンは、参加したキャンパーたちの相互理解を深め、そして各自がキャンプの意味を問い直す良い機会になりました。リーダーの具体的なアドバイス等が初回参加者にも広く深い見方を促し始め、自主的参加型のワークキャンプを目指しています。

昨年、13回までのキャンプをまとめると、キャンパーの数はタイ人が３２７名（延べ数７４０）、日本人90名（延べ数２０３）、オーストラリアを含む総数が４７９名（延べ数１０３７）。各回の平均参加数者は80名で、平均参加回数は２・２回（６～１３回参加者が32名）でした。

今年、第14回ワークキャンプは８月11～13日アムナーチャルーン県のカムノーイ村で、昨年に引き続き2度目の開催でした。キャンパーはタイ人51名、

日本人9名、オーストラリア人7名の総勢67名（初参加18名）。日本とオーストラリアは前日夕に会場入り、一番遠いチェンライからは前日の午後に出発して当日朝に到着し、7時の朝食から始まり3日目の15時半まで寝食を共にしました。男女別に2カ所の宿舎で、すべてのプログラムを色別の3チームで分担して行動をします。

オリエンテーションから開会式、そして評価の時間と閉会式までの間に、ハンセン病に関する学び・レクレーション・分かち合い等ありますが、労働の時間が主です。その内容は、旧保育所のコンクリート張り（浸水予防に土盛り後、19・5×6m）、高齢者用にトイレの改修2室と高齢者宅の掃除が2カ所でしたが、労働の11時間を5回に分けて予定通りに終了しました。

その他に会場の掃除・食器洗いは勿論、今回は3カ国が母国の食事を1食、色別のチームメンバーと作るという試みがあり、3食共「おいしかった」の声だけでなく、食事作りの間のコミュニケーションと文化交流ができたと好評でした。今年の主題は『チーム』。前回まで色別チームはあまり機能しませんでしたが、今回はキャンプ経験者の青年実行委員がチームリーダーになり、メンバーへの具体的な働きかけをしていました。数年前から、施設で育った青少年だけでなく一般の青年が参加し始め、ハンセン病問題の啓発にもなってきました。多くの顔に笑みがあり、声を掛け合って協力し合い、過去一番のワークキャンプとなり、皆がそれぞれに満足して別れを惜しみました。

雨期にもかかわらず好天に恵まれたことは確かですが、まさしく過去の経験を積み重ねた上でのキャンプだったと言えます。青年実行委員会は4月の下旬から「どのようなキャンプにしたいか」を話し合い、その後にラインでの相談を続けて、6月上旬に1泊2日の最終準備会を開き具体的な詰めをしました。2年続きで、開催地の住民協力が良かったこともあります。3年前に歌集として作ったハンドブック（タイ・日・英版）には、ハンセン病に関する一般知識があり、日程表には時間毎の労働内容が明示され充実していました。

最後に、10月のリユニオン日程を案内して再会を呼びかけるという、次へのステップもありました。

支援
シーカー・アジア財団

奨学生同士の交流を目的としたワークキャンプ開催費

「文化交流ワークキャンプを開催しました！ バンコク、タークク県、パヤオ県から学生が集結」

シーカー・アジア財団国際部　山田大貴

●財団概要

シーカー・アジア財団は、バンコクにあるタイ国内最大規模のクロントイ・スラムに事務所を置き、主にタイの子どもたちへの教育支援活動を行っているボランティア団体です。1979年にカンボジア難民救済で設立された曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）から1981年12月に曹洞宗ボランティア会、現在の公益社団法人シャ

ンティ国際ボランティア会（SVA）に引き継がれた団体のバンコク事務所として1991年まで活動しました。その後、同年9月にタイの現地法人となり現在に至ります。タイは「中進国」と呼ばれ、バンコクでは華やかな都市の生活がありますが、階層間・地域間で大きな格差が存在しています。バンコク郊外合わせ約2000か所のスラムが存在し、クロントイ・スラムでは約10万人の人々が暮らすといわれています。一方、国境付近では電気が通っていないという村も多く、少数民族の子どもたちはろうそくを灯して宿題をしているという状況もあります。ASEANの背景を受けて、タイへ出稼ぎに来る移民労働者の子どもたちが置かれる教育環境は厳しい状況にあります。同じタイで暮らしながら、子どもたちの教育の機会は決して平等とはいえません。私たちは、タイ社会の下層に置かれながらも精一杯頑張る子どもたちの小さな背中をそっと押し、教育の力で貧困の連鎖を断ち切るために、図書館事業、移動図書館事業、奨学金事業、学生寮事業、保育園事業などを行っています。

●活動報告

8月10日から13日にかけて私たちが運営するシャンティ学生寮（タイ北部パヤオ県ポン郡）にてワークキャンプを実施しました。集まったのは、バンコクのスラム地区とタック県・パヤオ県の少数民族居住地域で暮らす中高生100人で、学生たちは皆、シーカー・アジア財団の奨学金を受けています。このキ

ャンプは、奨学生同士が地域や年齢を越えて交流することを目的として企画され、タイ国日本人会の皆さまからのご支援により、この度、第1回目の開催が実現しました。

キャンプは10日の夜から始まり、初日は、開会式と自己紹介および班決めが行われました。2日目は、学生寮の田圃で田植えを行いました。田植えは寮生たちを中心に参加者全員で協力して朝から夕方まで行われました。通常は寮生が数日間かけて行う田植えを、今年は1日で終えることができました。タークー県とパヤオ県の学生たちは、普段から農作業をしているため、裸足で田圃の中をスイスイと移動し、慣れた手つきで作業していました。一方、バンコクの学生たちは人生で初めての田植えに苦労しつつも、他の学生に教わりながら楽しそうに作業していました。1日を通して共同作業を行ったことで、学生たちの距離は一気に縮まりました。3日目は、老朽化した学生寮の建物と設備へのペンキ塗りを朝から昼過ぎまで行いました。寮生たちはもちろん、他の参加者たちも自分たちが宿泊し利用しているため、一生懸命作業に取り組んでいました。

終了後には近くの運動場でサッカー大会が行われました。皆が裸足になって無邪気にピッチを駆け回り、ボールを蹴っていました。決着がつかずPK戦に突入する試合もあり、ゴールの結果には試合をしていないチームの学生たちも一喜一憂し、全員でサッカーを楽しんでいました。また、この日のレクリエーションでは各地域の伝統舞踊の発表会が行われ、平地タイ、北タイのモン族、タイ北西部のカレン族が文化交流する貴重な機会となりました。今日がキャンプ最後の夜ということで別れを惜しみ、中には涙を流す学生もいました。

最終日の朝の閉会式で学生たちに修了証書が授与され、3泊4日のキャンプは終了しました。

参加者からは、「田植えはとても疲れましたが、皆と一緒にできてとても楽しかったです」、「新しい友人ができてこのキャンプは最高の思い出になりました」といった声を聞くことができました。

奨学生たちへ貴重な機会を提供してくださり誠にありがとうございます。なお、貴会の皆さまからいただいたご支援は、バンコクおよび各村から学生寮までの往復の移動費、ペンキと道具の購入代、食事代として大切に使わせていただきました。今後も、奨学生同士が交流するイベントを定期的に開催していきたいと思っております。

改めて、タイ国日本人会の皆さまからのご支援に心より御礼申し上げます。

HP:http://sikkha.or.th/jp/
FB:https://www.facebook.com/sikkha.official/